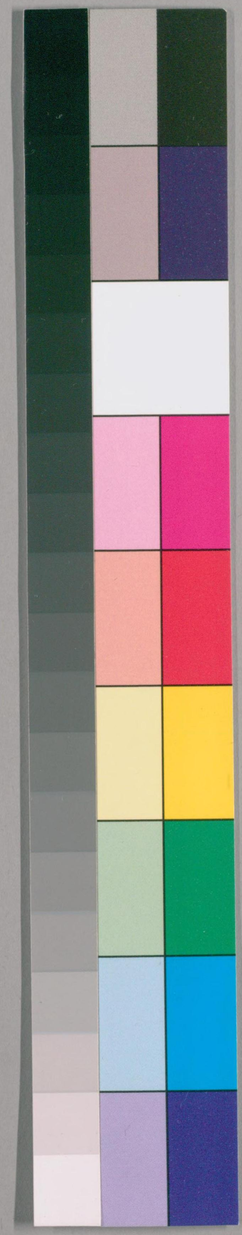
詠花百首

加藤枝直自筆

別12
20



国立国会図書館　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20

ガラス使用

詠花百首

帝国図書館

国立国会図書館　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20

ガラス使用

詠花百首

待花
載花
尋花
花如雪
花未遍
惜花
見花
散花
折花
剔花

橋氏蔵書

国立国会図書館　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20
ガラス使用

思花
遠花
近花
曉花
曙花
朝花
夕花
夜花
山花
峯花
谷花

何もまなく花を思ふと祥もなき花のめたる風恨そあらん
海こしの尾上の桜咲ぬ　杉の杉にかゝる志ら波
はるへとて風はたのも　新浦にさし入枝の葉そ薫れる
かゝしさて霞に蔵る在明の月も花乃光をすらむ
萩といふもも志ましはさすれ　花に風なき春の曙のそらに
今ふは又幸山桜行てこん朝家なるら　馬に草入
明るこんと花に笑て　鶯の遠は帰さ道る夕つゝの氣
葉の下に笑るはうとも思ひぬ　ぬよ祝よて　ふ蔵や鶯のすらん
岩のふこかこしのかひてて　学に細ぬ花の雲をとて見る
咲ぬろす風こそ　薫れ中よまよふ　ふ桜咲ぬらしも
光なるに谷ふとこゝろに咲ぬ　さそふ風も志る遠さらなむ

渓花
葉花
杣花
杜花
林花
岡花
関花
師花
河邊花
瀧邊花
海邊花

雲を志つむ渓の岩の葉さけは陰行ぬの浪そ薫れる
たれたる山の杉の霞るは　ふりとの花乃匂ひなりけり
はくら咲ぬるの杣人心をよ斧の音に花もこゝろ也遠
里遠花もりの一本の花さけは　あらぬ杉も　あら遠に見
なるへしかひはなくかりこゝ　桜し花の林となると見るまも
かの岩の葉咲ぬ　あのりとにわらふさもてこいさ行てこゝ
関といふせ花にある部は　ふ遠まとも花の木殖て旅人とゝめよ
ゆつかさに咲る桜の下蔭は　杉の木殖の花乃こゝ　ふ
河岸にまもふる部さんも　何をしなり花一本のゆかりと思へは
水上の岩もと桜咲ぬ　あてなこせて　瀬の志ら玉
砂葉つむめさしかはしてをしへまはしも志ら花の一もと

湖邊花
池邊花
江邊花
水郷花
橋下花
樵路花
行路花
洛陽花
禁中花
社頭花
古寺花

花の香を香れの何ぞ[illegible]さそひきて浪さへ薫る鶴の[illegible]
咲よりうつろふ[illegible]池[illegible]あやに織なす花とゆらむ
流江の堤つゞきに[illegible]とまをに見つゝそ船も入来る
芹つむと水を濁して咲より花の鏡の河つらの里
石走る瀬はすくとも山桜つゝれ[illegible]と浪して栄橋
志りとゆふ[illegible]木のうつる世紀日を[illegible]て帰る山[illegible]
春の日の[illegible]のこゝろは咲花の[illegible]道は[illegible]
春なまさや百の官の[illegible]桜さ[illegible]紀[illegible]の[illegible]
雲のよまさ[illegible]の[illegible]は近紀[illegible]の桜さくらむ
[illegible]の[illegible]より[illegible]山桜枝も[illegible]合て[illegible]
[illegible]の花に志られぬ[illegible]桜[illegible]の神

閑居花
山家花
田家花
塩屋花
故郷花
里花
市花
隣花
花惟家
庭家
軒花

[illegible]の音を[illegible]
夏は[illegible]花[illegible]の山[illegible]
牛[illegible]の[illegible]の桜[illegible]
浦風に[illegible]塩竈の[illegible]花に[illegible]
古きと[illegible]花の[illegible]人は[illegible]
うらやまし里の名[illegible]花桜[illegible]人や[illegible]
[illegible]市女[illegible]
[illegible]花の[illegible]
[illegible]花[illegible]
[illegible]
東屋の軒の一本の桜花[illegible]

霞中花
雨中花
雨後花
花帶霧
花映日
月前花
風前花
花交松
竹間花
花雲
花雪

てりもせず曇もはてぬ花にこゝろ月にしたりかは
ふりはてこゝとや波の咲ぬらさつらきの花をうる雨
立よりてなこり此雲にいさぬきん花に晴ゆ　村雨のそら
朝なく雲の白玉ぬさとあて咲ふきさつら亂をもうな
出るより霞に匂ふ春の日此花にいそかぬ新うのとけさ
春の松此ぬりつなくも咲花は月の桂に枝かはらじ
常磐木にやとり定まるの風葉の何なりに何さくらむ
松ひとり立りとのこや思はましならぬ柳に花のさかすは
呉井の志けに此ことを清き出てう花ふし志るぬ花咲により
此ゝは又何にくらへむこゝへつる詠の雪は久しも春も如し
葉なれや今もて雪のこゝと思ひけらずはひさるあす

花亀
花香
花梢
花枝
花挿頭
花手向
花莚
花衣
花錦
花鏡
花主

さくら花さかりの久しは落られ　ふりくも人のこゝろ深らむ
雪の刈ふるかくれる老らくのゝあるや花の香に匂ふらむ
何をれしも古木の梅咲にかりあ千の松に柳くらへる
かくさかり梅ゆる花の咲ぬまは枝のいつこにうりかうしは
さらさらに此心も志らてこゝ新つゝ本代と契りてかさに一枝
やゝ雪る行花の白幣たむけてまも山路こゆらむ
花の下に十尋の菱こも数まけて七ふまきらん春せ友かた
名まさらて何こゝる花になれ花やしかはしも久しは濃かうし
織かけし秋の柳此緑にもこゝらまさりぬるなるの久しくへ
咲花の匂ひも久しも本こゝ本にまたこの境これと何かれ祢
しまさこに一本の桜ゆり殖て花此あるしといつ如に久ん

花使　ちらすなとくりこといひて一枝の花の使ハ帰しをうまつつ
花舎友　こゝろ何かうらはゆゑ花ハ舎りて花日の友かさにして
花留客　よしさらハ思ひ物をかゝらんとこゝろ古人をまつまりせて
花未飽　何ゝまゝおしとて思ふ春の日に秋の枝をくて花ハ見るとも
惜花　なしまりなひまりてつらうらハ数とも花に袖ハぬらさし
花浮水　数花と思へハうらてやり水の水に積る雪とこゝろ見ん数
花半散　ちりちらぬ枝ハ力のこ雪とのこつもりや花のなりたるかん
落花　かさせとも老をうらさぬ花ハ今ちりて既の雪をそこのむ
殘花　着て行まちの別出ハ何ゝんとや何山桜ちりのこるらん
守花忍恋　多ゝ出ん物や思ふとくやこむ花をしむといひハなすとも
守花待恋　何ゝまをいつとかまたん待ひのまたなしとて花ハさけとも

守花逢恋　うれなりしお坂の関こしさらハ吉野の山の花をりんましや
守花別恋　根にくる花ハ又こんまちまたにいつと契らぬまれくるしも
守花顕恋　花ゆゑに何ゝもれなり深山木に交る桜も人の心も
守花増恋　うつろもんうしゐめらさに人志れぬ我こひさくら色まさるらん
守花切恋　石たしる瀬にうれ力ハなりすとも人をとてやまむ山桜かな
守花厭恋　何ゝなるし花のあらりハこまさる此間のつてこにいたれなりけり
守花恨恋　雲の侶うらこよとてや浦風の氏をしかゝ雲の為と信すらむ
守花絶恋　妹兄山中行水(河の)の逢ひてゝ岸の桜此新もうつる此
花下離別　深かけて宮にくらしる東桜かりれも誰も心ゆけてきに
花下旅宿　宮なりハかさらむ花をとる枕旅にしあまたん程なりこそこゝろ
花前述懐　花見るをおもひ出にして一年ハ春待のこそこゝろかゝる

花催懷舊　うらくに花咲よりかけこもれしかるに花代もまくしに
花笑萬春　萬代と笑ふ花ふるゆや蓬さかり春をよくしは
かきり志ふ也ハ

右百首明和六年正月題を友に得て作　枝直

国立国会図書館　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20
ガラス使用

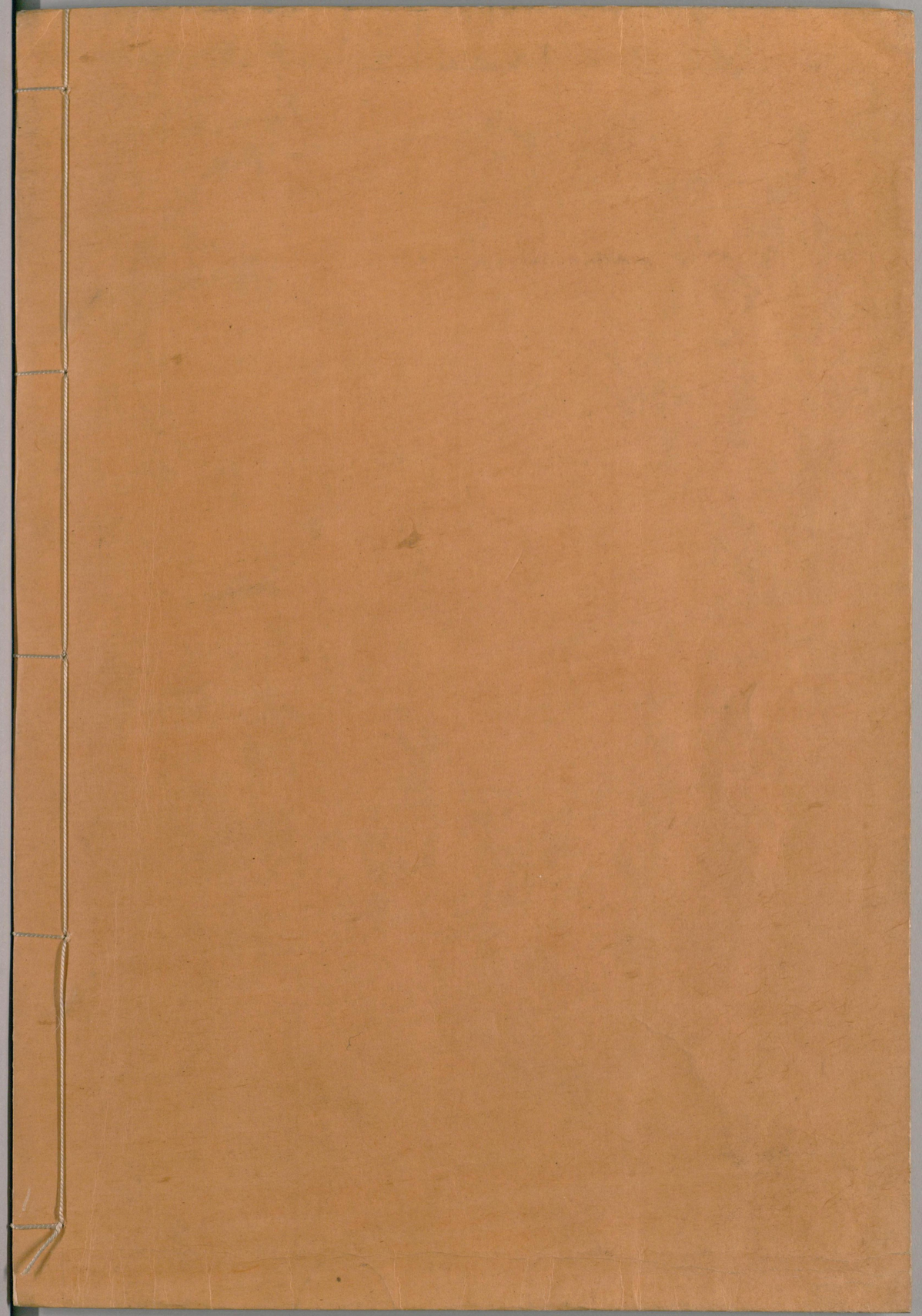
国立国会図書館　タイトル『詠花百首』 請求記号 本別12-20

ガラス使用

別12
20

国立国会図書館　タイトル『詠花百首』 請求記号 本別12-20

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『詠花百首』　請求記号 本別12-20

ガラス使用